
気分は良いんだ

dフェイゲン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

気分は良いんだ

【Zコード】

20778

【作者名】

dfヒュイゲン

【あらすじ】

気分はいいはずなのに、何がしかの不安感が付きまとつ。

問題なんて本当は何もないのに、問題を作りたがる。

そんな少年のお話です（ちょっと違うかな）。

親戚の「太ったおばさん」がちょっとしたことで入院し、僕は……。

「良い時期があつたわ
おばさんが言った。

とても太つたおばさんだ。
だから僕はいつもおばさんことを心の中で便宜的に『太つたおば
さん』と呼ぶ事にしている。

ただのおばさんではなく太つたおばさん。
そうする事で彼女の特別な位置付けが生まれる。

あまり素敵な位置付けだとは言えないが、太つてているのだからしか
たがない。

おばさんの太り方といつのは奇妙で脂肪が不思議なつき方をしてい
る。

なんていえばいいのだろう、肉付きの『ぐく』平凡な中年の女性に、巨
大なパテでまんべんなくバターを塗つたよ うなそんな太り方をし
ている。

このように言葉で表現するとたちまちおばさんの太り方は現実味を
なくしてしまうのだけれど、実際にみても らえればわかる。
それはとても不思議な太り方なのだ。

実際のところ、僕はこの太つたおばさんがあまり好きではない。
彼女と僕は血の繋がつた親類で、皮肉にも太つたおばさんは僕のこ
とが好きだ。

「本当に良い時期があつた」
太つたおばさんがもう一度そう言つた。
はじめよりもずっと小さな声だった。
だからそれは言つといつよりもつぶやくといったほうが適切なのか
かもしれない。

それとも、つぶやくよりももっと小さな何か、ため息をふうと吐くついでに太ったおばさんはその言葉と一緒に吐き出したのだ。

「でも、悪い時期もありましたよ」

僕は言った。

「そうね、良い時期があるから悪い時期があるんだわ」
そしてもう一つ付け加える。「これは一般論だけどね」

「そうですね」と僕は言った。

相槌でも打つておくほかないじゃないか。

午後の病室は心地のよい暖かさに溢れていた。

太ったおばさんの部屋は三階の窓際にあって、夕方になれば西日がひどい。

それでも、僕は悪くない部屋だと思った。

窓から見える大きな樺の樹がいい。

緑色の葉が風に身をあずけている様子はなんとなく仲のよい義理の親子を思わせる。

腹違いの兄弟だとか、ライオンと野生児だとか。
いづれにせよ彼らはとても中がいいのだ。

風が窓をすり抜けて僕と太ったおばさんの表面を撫でた。
窓がすこしだけ開いていた。

太ったおばさんのスカートが風をはらんですこしだけたつき、やがて風が止むと再び大人しく太ったおばさんの肌にぴったりと寄り添つた。

そしてつぎに吹いた細やかなそよ風がスカートをおばさんの腿の上で軽やかに波立たせた。

おばさんはベッドに寝ていて、シーツをかぶつてはいない。
上半身を起こして僕を見ているので、ベッドに腰掛けているといったほうがしつくり来るかも知れない。

「でも、本当に信じられませんね」

「なにが?」

「おばさんが転んだぐらいで入院しちゃうってことがですよ

おばさんはあごもとの肉まで動かして笑った。

「私だって、そんなにいつまでも健康じゃないわ。それにこんなに太つているのよ。むしろ普通の人よりもずっと不健康だと思つ。もう少し年をとつたら散々よ、きっと。ひどいことになるわ

「そういうか。

僕はね、おさんのこと、小さこときからとも健康的な人だと思つていたんです。

「だつておばさんはいつも元気だつたし」

「元気、というよりも笑つていただけ。

わたしナオ君の前じやつについ微笑が漏れちゃうのよ。ちっちやい時のナオ君はかわいかつたからなおさらね

確かにおばさんはいつも笑つている人だつた。

体がビアダルのように太つていて、そしていつも無用に笑つているその姿は僕にとつて鉄壁のけして搖るぐことのない残像を作り上げていたのだけれど。

「そうそ、あのころはよかつたわ。

ナオ君の家にだつてずっと近かつたし、千恵ちゃんにもすぐに入れたし。

でも今はナオ君とは一緒に暮らしているわね。

そういう意味では幸福かしら

「ええ、今の家だつて素敵ですよ」

「ありがと。

でもね、つい昔のことを思い出しちゃうのは人間の癖よね。

おばちゃんの中にいるヒューマニズムつていつのかしぃ。ほら歌にあるじゃない『昔はよかつたね』

そんな歌は知らない。

「デューク・エリントンよ。

退院したら聞かせてあげる

「はあ」

「でも私がいない間に勝手にレコード棚をあけちゃダメよ。ちゃんと覚えといて、うちに帰つたらかけてあげるから。特に聞きたくもなかつたけれど、僕ははいと返事をした。

のどが渴いたのでジュースを買いに廊下にでてファンタグレープを買っておばさんの病室に戻ると、おばさんは窓をにらんでいた。

夕暮れだつた。

学校が終わつてから病院をおとずれるので、僕たちの面会は必ずといっていいほどに夕暮れ時が含まれていた。

おばさんの入院している病院の周囲には背の高い建物がほとんどなく、夕日はその赤みを惜しげもなく世界に振りまいていた。それは、窓をすり抜けて、それぞれの病室に侵入する。太つたおばさんの病室とて例外ではなかつた。

「真つ赤ね」

おばさんの、ぶよぶよとした素肌が朱色に染まつていた。

室内は、不自然なぐらい赤くなつていたが、ここではそれ普通であった。

僕はファンタのフルタブを空けた。

「きれいですね」

と僕はいつた。

実際にはきれいだと思わなかつた。

目が痛かつた。

太つたおばさんが体勢を変えて、僕のほうを振り向き言った。

「ここから、病院に出入りする自動車の数を数えていたの」

「暇なときは僕も昔よくやりましたよ」

「そうね」

「それで小学生のとき、塾の授業中に、窓から見える車の数を数えていたらおこられた。『大塚、外を見るのは楽しいか』って。

別に楽しくなんてありませんでしたけど

「たくさんの中車が出入りしているのね。

でもたいていの人はちょっとした用事だと思つけど。
ほんとに大変な人は悠々と自家用車で病院にやつてきたりしないで
しょ」

「おばさんは歩いてここまで来ましたけどね」

僕たちは笑つた。

「さあ、もう夜になっちゃうわ。

夕陽が落ちだした夜が来るのなんてあつという間よ。
ほんとにあつという間なんだから。

あなたは帰りなさい、明日も学校があるんでしょう

「わかりました。

でもこのジュースを飲み終わるまでの間ここにいますよ」

太つたおばさんは微笑んだ。

そして僕はグレープを飲み、中身をすべて失つたアルミニ缶を持って
病室のドアを開けた。

「さよなら。

来週また見舞いに来ます」

「ええ、今日はありがとうございます」

「来週はレポートの提出があるので少し遅れるかもしねませんけど」

「じゃあ夕陽が落ちてしまわないうちにね」

太つたおばさんが転んでからもつ三週間が経つていた。
三週間前のその日、伯母さんはある種の必然性を伴つて散歩先で転
んだ。

足腰がすっかり弱くなってしまっていたらしい。

運がよかつたのかどうなのかは知らないけれど、骨折もしなかつたし、目立つた外傷もなかつた。

しかしおばさんは入院した。

大学から帰った僕が病院の通知を受けておばさんの病室に行くと、看護婦が言った。

「いろんなことが不安定になっています。

大事をとつて入院していただきました」

いつたい何が？

やはりその日も午後で、沈みかけの太陽が赤い色を病室いっぱいにしみこませていた。

入院費は僕が払つた。

太つたおばさんには身寄りがない。

太つたおばさんは結婚経験がない。

僕は大学へ通うためにおばさんの家に下宿していた。
一浪をしてやつと通つた大学は、実家からあまりにも離れていたし、かといつて見知らぬ下宿先を探すほど 金銭的な余裕はなかつた。
そんな折、おばさんの家が大学に近い位置に存在していることが判明したのである。

しかし、このことは僕にとつては喜ばしいことはいえなかつた。
先に述べたように、僕はこのおばさんがあまり好きではないのだ。
そんなわけで、僕は表面上はおばさんに笑顔を振りまきながらも、内面憂鬱さの勝る大学生活を始めることが となつた。

太つたおばさんは、僕に優しくしてくれた。

昔からそうだけれど、この人は僕に少しやさしすぎるところがある。
太つたおばさんと僕の母親はとても仲がよかつた。

二人はまるで本当の姉妹といつてもいいぐらいの仲良しで、僕が小学校の低学年時代を卒業して、中学年（いわゆる三年生から四年生の期間だ）になるころまでは頻繁にお互いの家を行き来してい

たようだ。

その後おばさんは今住んでいる土地へ引越しをし、やがて僕の家を訪れるることは少なくなつていった。

僕は成長するにつれ自然に記憶の片隅に存在する沼の中へと彼女の存在のほとんどを葬り去つていった。

しかしひとつだけ、僕にとつて忘れがたい出来事があつた。

それは僕がまだ六つか七つのころに起こつた出来事で、たいしたことではないからどうしてこんなにも鮮明に覚えているのか正直言つてわからないのだけれど、記憶というものはえてしてそういうものなのかもしれない。

それはこんな出来事だ。

ある晴れた日の午後、どういうひょうじにか知らないけど、僕は太ったおばさんと一人きりになつた。

僕は苦手なおばさんを避けて一人で遊んでいたのだと思つ。僕は庭で土をいじつたり、蜜を求めてプランタの花に群れている蝶々を眺めたりしてすごしていた。

でも、ふとしたきっかけで庭に出てきたおばさんと、正面からぶつかつてしまつたのだ。

おばさんのおなかは柔らかかった。

それは太つているというよりも、肉付きのよい、健康的なおなかだった。

僕が言葉も泣く、叔母さんのおなかに顔を埋めたまま戸惑つていると、おばさんは旧に僕の腰に両手を持つてきて、僕の体を持ち上げたのだ。

高い高い、だつた。

おばさんの頬がゆがみ、彼女が微笑んでいることがわかつた。とても醜い微笑であつた。

持ち上げられた高さからは、ちょうど庭に面したキッチンの窓がのぞけた。

僕は大人の背丈から見た、住み慣れた我が家の光景に違和感を感じた。

そしてそれ以上に恥ずかしかった。

7歳といえば、もう誰かに抱きかかえられて「高い高い」をしてもらひつ年齢ではないのだ。

僕はおばさんの手の中で暴れた。

するとおばさんはちらりと困ったような表情を田の中に見せたかと思つとまた微笑んで、素直に僕を地面へと下ろしてくれた。

僕は逃げるように家屋の中に入り、キッチンの窓から庭を覗き込むと、太つたおばさんはそのまま庭で何かの作業を始めたようだつた。

十数年も昔の出来事なので、いろんな部分は僕の頭の中で脚色されているかもしねりない。

だけど、太つたおばさんが僕の腰の括れを両腕ではさんで僕の体を持ち上げた瞬間、そしてそのときの太つたおばさんの笑い顔、それらはまるで何度も繰り返し再生しても画質の劣化しない、よくでききたビデオテープのようにはつきりと思い出すことができる。

なぜだろう、その瞬間はとても奇妙なのだ。

何が奇妙なのかはわからない。

だがしかし、それは奇妙なのだ。

この感覚は、答えの教えられない間違い探しのような感覚だつた。僕はおばさんが引っ越した後も時々、この瞬間を思い起こしては奇妙の原因である「間違い」を探した。

しかし結局そこに答えは見当たらなかつた。

太つたおばさんの醜い笑顔と健康的な休日の午後のきらめきのアンバランスが生み出した違和感だろうか。

それとも、おばさんの腹が想像よりもふくよかで柔らかいものだつたという触感的事実が提議した違和感だろうか（僕は太つたおばさんの腹は出つ張つっていて力チカチカだろうと思つていた）。

僕の想像は常に、美と腐敗の取り合はせが生み出す意外性に固執していた。

太つたおばさんという存在そのものが、僕にとってはある種の腐敗を思わせるからだ。

しかし太つたおばさんの実質的な優しさは、僕に美しさのようなものを感じさせた。

僕はおばさんの優しさがむしろ嫌いだったはずだけれど、想像の中においてはそのやさしさは美の象徴ですらあつた。

だが。

僕は時々思つ。

あの瞬間に感じた奇妙さは、美と醜の対称だとそんなものとは関係がないのだと。

なんとなくそれがわかるのだ。

だからといって奇妙さの正体が見えたわけではないけれども。

それは今までの僕には理解し得ない種類の物事であるような気がした。

体が、どこかの器官でそれを認知しているが、僕の脳はそれを形として知覚し得ないのである。

それを認知している器官が自分の体のどこに埋め込まれているかも知らないのだ。

それはただあるのだ。

僕の、太つたおばさんに対する感情に關しても同じことが言えた。

僕は、なぜ彼女のことが苦手なのか知らなかつた。

あるいは彼女の優しすぎるところが嫌いなのかもしれないし、あるいは彼女の醜い笑顔が嫌いなのかもしれない。

しかし、それらの仮説はすべて根本的な点で誤つているように感じられた。

「ねえ？」

「うん？」

「今、どうかしら」

「なにがですか？」

「今がネ、良い時期なのか悪い時期なのかなってこと」

「さあ」

「私、一週間ずっとと考えていたの。今がいい時期なのか、悪い時期なのかってこと。

ほら、いつたでしょ、前にあなたがお見舞いに来てくれたとき。良い時期があつたつて。この世界というか人生にはいい時期があつて、悪い時期があつて、それで気分も変わっていくん だつて。正確にはそのままの言 葉じゃなかつたかもしれないけど、そんな内容のこと。昨日ちよつとだけ話したでしょ?。やっぱりいい時期な 気がするわ」

「じゃあやうなんでしょう」

「うん。

私はこんな事になつて、はつきりいつて不幸せな境遇つていうほつがひつたりだとと思うけれども、それでもね、 気分は悪くないの。すつごく不幸だという気がしないのよ。

これっぽっちも。

不思議ね、でもね、どこかで、これは最低だつて思つてることも確かなの。

つまり、全体でいけば今の私はすゞく不幸なのね。でも、また『でも』って言つけど、今とこつ一瞬で言えれば私がひとつ事ないのよ。

だつてこのベッドはとても気持ちが良いし、私は体のどこにも痛みを感じてはいない。

どうしてだろ、すつゝへ[女]りこでゐる。

こんな事つてないわ。

体中の力が抜けていくよ。

すごくなんていうか、広いでの海みたいに心地良いのよ。

おかしいでしょ。

一方冷静に自分の事見れば、泣いちゃうぐらい悲しくなつてくる。だから、私の中に大きく一つの感情があるのね。

悲しくてかなしくてたまらない私と、疲れてしまつて座り込んでいて座り込む事の気持ちよさに立てなくなつて いる私「そこまで言つて口をきゅつと結んで、再びあけた。

「駄目ネ駄目ネ駄目ね」

太つたおばさんは泣いていた。

「気分が良いの。

どうしよつ。

気分がいいのよ「そしてそれつきり、黙り込んでしまつた。

彼女は両手を顔に持つていつて、手のひらでその肉付きのよい顔を包み込んだ。

その様はまるで泣いて入るよつに見えた。だけ泣いているわけではなかつた。

時折、風がしゅうつと音を立ててふいた。

僕は口笛を吹いた。

吹いてから気がついたのだけれど、イナフ・ズナフの「ハズ・ジー ザス・クロースド・ヒズ・アイズ」だつた。

僕は赤くなつた。

病室で吹くにはあまりにも暗示的な曲だつたからだ。

だけど一方で、今の僕たちにはぴつたりの曲であるよつこも思われた。

「ぐ自然に出てきたのがこの曲だつたのだ。

その点では僕の感性が不安な未来を予見していたとも言えなくはない。

我々は眼を開けて来るべき裁きを受けるべきなのだ。

「いい曲だわ」おばさんが手のひらで顔を覆つたまま言つた。

「でも、すこしくらい曲です」

そう答えながらも僕は胸をはつた。

おばさんは顔から手を離した。

「そうね、いい曲つていうのはたいていが暗いわね。」

そういうてから付け加えて

「あと、いろいろ曲でもいいで口笛を吹いては駄目よ」

そのとおりだつた。

その曲が何であれ、病室で口笛を吹くという行為そのものが好ましい行為ではあるまい。

結局僕は赤くなつた。

今は赤くなつて己を恥すべき時なのだ。

「なんだか、歌が歌いたくなつちゃつた」

太つたおばさんが言つた。

「カラオケというものがありますよ」

「私、行つたことがないのよ。

今度連れて行つてくれる?」

「ええ

「じゃあそのつこでに買ひ物もしましょ」

「ええ

「先ずデパートによつて、お食事をして、それからカラオケ」

「デパートとカラオケといつのはなんだか合わない様な気がしたけれどあえて口にはしなかつた。

たぶんデパートという高級な響きとカラオケというチープな響きが磁石のN極とS極のように対立しているんだ」と思つ。

だけど高級なカラオケや安っぽいデパートがあつても悪くはないし、

その逆だつてありつる。

それらは相反しながらも互いに引き合つてもいるのだ。

そして二つをひとまとめにする限り我々は高級セミナーとチープセミナーを同時に手に入れる事が出来るのだ。

「なんだかデートみたいですね」

僕は言つてから後悔した。

太つたおばさんは嬉しそうに

「デートですつて」

笑つた。

赤茶けた夕暮れの病室にあつてその笑い声は異質なもの一つであった。

病室はいくつかのそこにあるべきではないものを内包する性質がある。

それはたとえば元気極まりない人間であり、あるいは何気ないTV番組であり、あるいは僕の吹いた口笛であり、あるいは楽しげな笑い声であるのだ。

だけど、太つたおばさんの存在 자체はしだいに病室に同化しつつあつた。

たとえ異質なる笑い声が彼女から発せられたものだつたとしてもだ。初めておばさんが入院したとき、僕の目には太つたおばさんの姿が病室という空間から浮き出て写つた。

それぐらい僕にとって太つたおばさんという存在は病室とは程遠く無縁であつたのだ。

しかし病室はしだいにおばさんを摑り込みつつある様だつた。

静かな淡い雨がそつと音も立てずに地面へと吸い込まれてゆくよつに太つたおばさんという存在もいまや半 分ぐらいは午後4時の病室に吸い込まれてしまつていた。

そう、もう4時なのだ。

夕日の赤がなおりつそう強くなつていた。

トマトを潰したかのような赤が僕とおばさんの部屋に忍び込み影にならない部分を朱色に染めていた。

まるでトマト料理の具になつたような気分がした。
僕は『夕陽に赤い帆』を口笛で吹きかけてやめた。
これ以上不審な行為をするわけにはいかない。

「ねえ」

「え？」

「私たち、恋人同士になれるかしら？」

恋人同士。

「おばちゃんど、ナオ君ど」

恋人同士？

「ムリよね。

こんなおばちゃんどだもん。

太つてるし、病氣だし」

「・・・・

「冗談よ、冗談」

「うん」

しばらく、僕たちは沈黙というベールの中にお互いの身をひそめた。
その間に部屋はもつと赤くなつた。

こんなに赤い夕暮れは初めてだというぐらいに赤かつた。
この病室の窓の位置が関係するのかもしない。

僕は、太つたおばさんが恋人である事について考えてみた。

僕が太つたおばさんの腕をとつて商店街を歩くさまを想像してみた。
それはちぐはぐな映像であるように感じられた。

だけど、想像の中の僕たちが屋台のアイスクリームを買って食べる
と、とても幸せであるようにも感じられた。

僕と太つたおばさんは恋人同士になれたかもしない。
いろんなことが少しづつ違っていたら。

「ナオ君、好きよ」

太つたおばさんがつぶやいた。

つぶやいたそばから消えてなくなつてしまつのような種類のつぶやきだつた。

僕は太つたおばさんの顎を引き寄せてキスをした。

「ディープキスだつた。」

僕が舌をからませると、太つたおばさんもそれに答えた。
それでもつと深いキスになつた。

僕たちの舌が立てる音が静かな病室に響いた。

これもまた病室には異質な音の一つだつた。

口笛といい、笑い声といい、僕たちは病室にとつて異質な音を作り出すのが好きなのだ。

30秒ほど舌を吸いあつと、僕たちは自然に唇を離した。

太つたおばさんは僕に寄りかかろうとした。

僕は太つたおばさんを引き離し、携帯電話だけを握り締めて病室を出た。

走つて階段を下りてローリーにたどり着くと、息が切れ切れになつていた。

僕はあまり病院の空気を吸い込みたくはなかつた。

なぜだかわからないけれど、そこには小さな死の分子が空中に散らばつているような機がするのだ。

おばさんは、おそらく、もうその分子を数多く吸い込んでしまつてゐる。

たとえ、今の病状がよくなつても無駄なような気がした。

死はすでに彼女にとつて縁遠いものではなくつてしまつてているのだ。

死は仮定や可能性のひとつとして彼女の体の中にこびつてしまつた。

「気分が良い？」

「時期が良い？」

そんなことは関係ないと思つ。

ここには表面的・即時的な心象とは次元の異なる何かが存在していて、いつたんそれが体の内部に吸い込まれてしまえば、もはやどうすることもできないのだ。

そしてそれは、おばさんの体をくるんでいる脂肪にぶつぶつとあいた『分子レベルの隙間』に滑り込み、その一部として含まれてしまっている。

病院を出ると、もつと大きな夕陽が僕の頭上にあった。病室から見えるよりもずっと濃い朱色のインクが、視界のすべてを染め上げていた。

この光景は、なぜか僕に太ったおばさんのバターのような脂肪が、溶けて流れ出している映像を思わせた。

3階の病室から、トマトのような夕焼けの赤に混じったおばさんのバターのような脂肪が、世界中に流れ出でている。

そして油を惹かれた道をすべるように夕焼けはもつと世界中を赤く染めるのだ。

やがて世界中は、ついつい広げられた太ったおばさんの脂肪分に包まれるだろう。

ある不安な分子を含んでしまった脂肪分に。

僕は怖かった。

僕もそこに含まれているのではないか。

(後書き)

数年前に書いた作品です。

眠らせておくのももつたいないかな、と思い、投稿します。
これを書いたときはまだぎりぎり10代だったと思います。
懐かしい。

この作品を書いたすこし後ぐらごと、PCゲーム会社に就職してち
ょつとだけエッチなゲームのシナリオ書いたけど、どつも方向性の
違いがあって、やめました。
いい思い出です。

小説の感想いただけたらうれしいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0778j/>

気分は良いんだ

2010年10月28日06時01分発行